

国際会議を考える

スペインを旅して

津守 真

私にとってスペインという国は最も遠い国で、生涯の間に訪れる日があるとは考えたこともなかった。そのスペインの第一回幼児教育国際会議に招かれて、九月初旬にスペイン南部の町マラガに行くことになった。秋の新学期が始まって間もないときで、私は夏休みの後、久し振りに会った子ども達に心を残しつつ、スペインについての予備知識をもつ暇もなく出かけた。九月とはいえ、地中海を隔ててアフリカと向かい合わせの町はまだ夏の盛りで、コスタ・デル・ソル（太陽の海岸）と呼ばれる海浜は日光を楽しむ人々で賑わっていた。

生活

スペイン全土から幼稚園、保育園、大学の先生達が九百人程集まり、外国から招かれた人が七、八名加わり、五日間にわたって朝から夜まで会合はつづいた。朝九時開始とプログラムには記されているが、実際に始まるのは三十分以上も遅れる。スペインの人自身がスペイン時間と言っていたが、順送りに時間がずれるので、午前が終わるのが二時頃である。これはこの会議に限ったことでなく、日常生活でも同様らしい。それから昼食になり、午後の部は四時半頃からである。夕方は八時にならないとどのホテルもレストランも開かないので、会議は八時近くにならないと終わらない。そして人々は九時頃から遊びに出かけ、十二時をすぎても街には人々が群れている。昼寝（シエスタ）の時間があると聞いていたが、会議では打合せや分科会にその時間を使うので、結局非常に長い一日になってしまう。

スペインではスペイン語以外の言語が通用しないことも予想以上だった。会議には英語の同時通訳が設けられていたが、ひとたび個人的に会話しようとする、ごく簡単なことでも忽ち大変な困難に陥る。すぐ傍にいる大学の先生にたずねても、英語は殆ど全く通じない。こんなに言語の上で異国に来たと感じたことはこれまでにない体験であった。けれども、皆控え目で人のことに気を使う点は日本人によく似ているように思った。

異国での会議に出席すると、子どもの保育の場とは生活の仕方も言語も異なるので私共

は苦勞するが、今回は殊更にそれを強く感じさせられた。

会議

会議では、スペイン国内の大学の先生達の講演がいくつもあった。何人かの人がコミュニティ・スクールを強調した。これまでの学校、幼稚園、保育園は、コミュニティから切り離して個人の能力や知識の向上を目指したが、これからは親や社会の人々の参加とその中での子どもの成長を考える方向である。親のためではなく、親と共に、保育するセンターを作るといふ考えである。私もこの考え方には賛成の点が多くある。ことに障害者の生活を考えるときには全く同感である。けれども、日本のように隣組社会の横のつながりが強い社会慣習を考えると、この点だけを強調すると危険も伴うだろう。個人として考え、判断し、意志すること、直接の周囲を超えた普遍的倫理や、異質な他者の文化に対する感受性を磨くことなど、日本では個に対する配慮をもっと必要としていることを私は話した。

会議では抽象的な話がつづいたので、私は務めて具体的な子どもの話を付け加え、更に、子どもは人間性の深い所で大人とは違った感受性をもっているので、そこを養うことが生涯を通じての人間教育の根本になることを述べた。そして、「七歳までは神のうち」といふ日本の諺を、幼児は神のコミュニティーに属すると訳してみた。(Children belong

to the community of Gods until seven years of age)

すなわち、幼児は大人とは違った独自の世界に住んでいること、また、大人は子どもを通して人間の深いところにある共通の心に気付かされるのであることを私見として解説した。

最後日、閉会式の際に、夜の九時からフランスのグタール女史の結びの講演があった。

女史はこの会議で大学の先生達が自分の学問理論を多く語って、子どもの姿が見えないことを指摘し、保育者養成に焦点をあてて語られた。次にそのいくつかを挙げておく。

*

○この会議では専門の幼児教育の養成について多く語られたが、幼児教育の実際においては、バラ・プロフェシヨナル（准専門家）の占める位置は大きい。すなわち、ボランティアや親が参加して実際の保育はなされる。しばしば高度の専門家の養成はコストが高くついて、しかも実際の場で不適切である。

○保育者養成においては子どもが中心でなければならぬ。学生の創造性が尊重され、実際の場に参加することが多くなければならない。保育の分野で専門的であるためには、人間としての自らの体験を豊富にせねばならない。教師自身が自立性と創造性を自分のものとして体験することは、保育者養成に欠かせない。

○われわれは子どもに対して謙虚でなければならない。限界のある大人の考えを子どもに押しつけてはならない。

○教育は固定したのではなく、前向きに、前進する社会変化に向かって作用せねばならない。ステレオタイプに陥ってはならない。

○小学校教育で成功することが幼児教育の目標ではない。

○研究と実践、科学と人間性とはひとつに結合するはずのもので、それらは専門的であるのみでなく、人間の広い領域にかかわるものである。

*

これらは今回の国際会議の結びとして当を得たものであった。

会議の後——エスポとプエブロ

会議の翌日、私共はセビージャ（セベリア）で開かれているEXPO（万博）に連れていってもらった。途中霧のかかる山の間を通り、バスで三時間かかる。早朝にホテルを出発して、セビージャ郊外の万博会場については午前十時だった。帰りのバスの出発は夜の十一時半と知らされ、十二時間以上も雑踏の中でどうやって過ごそうかと考えた。日本にいる時から、安土城の復元が展示されていると聞いていたし、スペインの人々から日本がどのように見られているかに関心があったので、大いに愛国心を發揮してまず日本館にいった。日本館は最も人気のある展示のひとつらしく、人の列は五重、六重に折り重なって延々と続いていた。炎天下二時間も並んでようやくやく入ることができた。十六世紀の日本

との交流に力点がおかれていて、安土城の絢爛たる一室が再現されていた。それに加えて紙製作の模型で当時の町や村のバノラマが作られていて美しかった。同じ程の分量で現代のハイテクの展示があり、更に回転劇場でドンキホーテが忍者ハットリ君と現代の東京にタイムマシーンで訪れるというアニメ映画が四場にわたって約三十分上映される。なかなか凝った工夫に感心させられた。その他いくつかの館を見て時を過ごしたが、クウェート館では石油産業の資料が沢山展示されているのに、湾岸戦争のことに少しも触れていないのは不思議に思った。入口近くにソニー・プラザがあり、広い広場にどこからも見上げることのできる巨大なモニター・スクリーンが設置され、各国の展示が上映されていて、沢山の疲れた人々の休み場になっていた。私共も夜の数時間をそこに座って過ごした。夜の十時を過ぎても、二、三歳の子どもを連れた人々が多勢歩いていた。

マラガからタクシーで三十分程丘陵の方に行ったところに、ベルナデマデーレ・プエブロという小さな村がある。白い壁のスペイン風の家の中に石畳の道が一段高い場所にある小さな教会にまでつづいている。私共が訪れた日曜日の夜、その頃には私共も八時から出かけるという異例の外出をするようになっていたのだが、セントロといわれる小さな中央広場のカフェに座っていると、赤ん坊連れの人々が次々にくる。あまりに子ども数が多いので、英語のできる人を探して聞いてみるが、特別の行事でもないらしい。むしろ、スペインの人は、家族と一緒にぶらぶら過ごすために仕事をするのだという答えが返ってき

た。私共の通訳をしてくれたグラナダ大学の法学部の学生は、この点では日本とは逆でしようと言って笑った。彼の父親は大学附属病院の小児科医で、母親は教員養成学部の方だが、両親とも毎日二時に家に帰ると、そのあとはずっと家で過ごしているという。大学も二時以降は授業はなく、自分は昼食後大学にゆくが図書館などで過ごすのだという。彼の英語は英国人並みの流暢な英語であるが、教養高く親切な両親は、全く英語を解さないのも不思議な位である。この青年は、この生活様式でスペインは国際社会についてゆけるのだろうかと思念を抱いていた。どの国も、否応なしに世界的な社会変化に巻き込まれてゆく。

OMEPP (世界幼児教育機構)

この会議にOMEPPの前世界総裁グタール女史と、次期世界総裁ビノー女史とが来ておられ、私共は毎日国際会議について意見を交わした。

国際会議では生活時間も言語も異なるので、私共は苦労する。けれども、保育者と交わると、その相異をこえて、いつのまにか共通点を発見している。子どもが神のコミュニティーに属すると同様に、保育の仕事をする人々は、子どもの心にあふれて、国境をこえ、ひとつのコミュニティーに属しているのではないか。私はこの十年間、OMEPPとかわる国際会議にいくつも出席して、このことを最初は理念として考え、次第に実際として確

信するようになった。

一九九五年には、OME Pの第二十一回世界大会が日本で開かれる。私はそのコーディネーターに選出された。その重さに耐えられるだろうかと思うこともある。けれども、保育の仕事をする者は、子どもの心とつながることにより、所属する組織や施設をこえて、共通の世界に生きているのではないか。保育の仕事をする者が互いに協力し合えなかったら、世界の平和などありえないのではないか。そう考えると、日本で世界大会を開くことも保育の日日の仕事とつながってくる。

(愛育養護学校)

